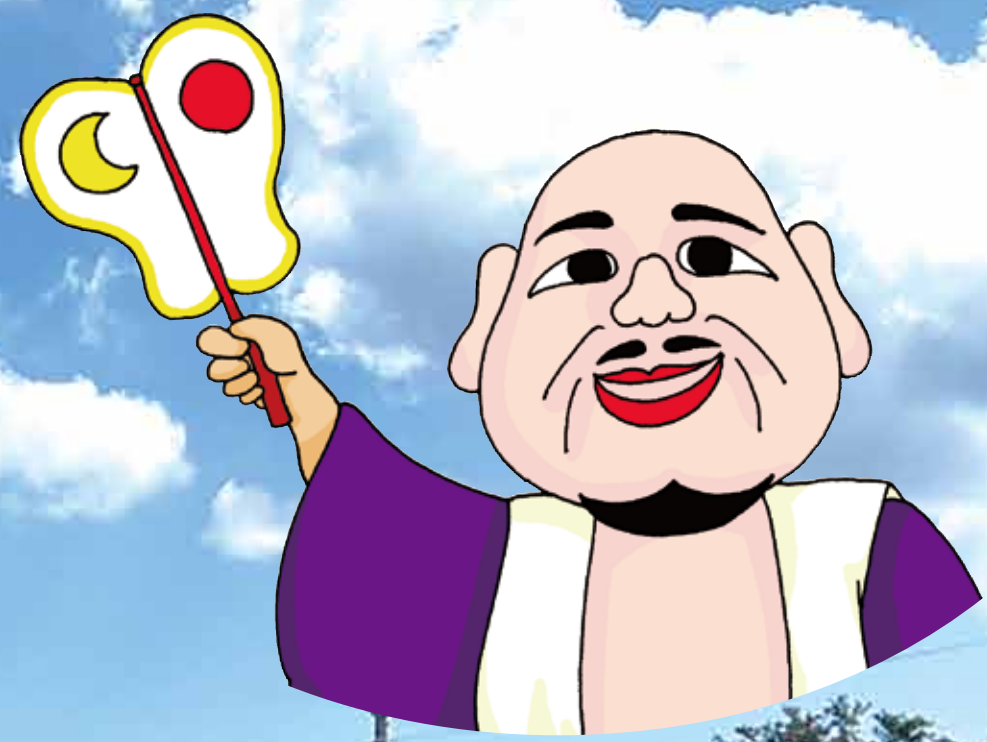


保栄茂の
ま ぼ
巻ち棒

ろくねん いちど だいほうねんさい
ー六年に一度の大豊年祭ー

保栄茂の巻ち棒 ー六年に一度の大豊年祭ー



カン、カン、カーン

お昼^{ひる}ご飯^{はん}を食^たべていると、
鐘^{かね}の音^ねが聞^きこえてきました。

急^{いそ}いでお母^{かあ}さんの作^{つく}ってくれた
冷^ひやしそうめんを食^たべ終^おえ、
部^へ屋^やの窓^{まど}から外^{そと}を見^みに行^いくと：



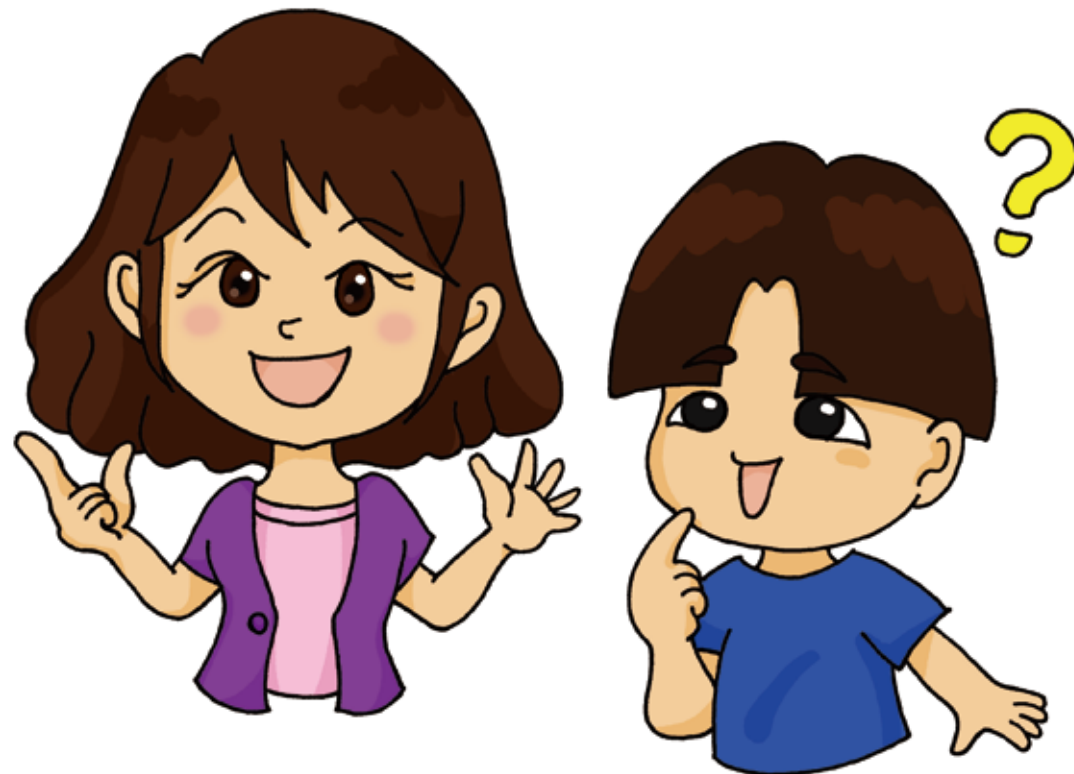
カン、カン、カーン
ブオー、ブオー
ケケケンケン、ケンケンケン
ピャー、ピュラララ

かつこいい衣装いしやうを着つけた
お兄ちゃんやお姉ちゃん、
おじさんやおじいちゃんたちが、
いろんな楽器がっきを鳴ならしながら、
家の前いえまえを歩あるいています。



「お母さんかあ！道みちジュネーやっみっているよ！
今日きょうはお祭りまつなの？」

「そうよ。今日きょうは豊年祭ほうねんさいだから、
あとで一緒いっしょに馬場ばばまで行いきましょうね。
今年ことしは六年ろくねんに一度いちどの大豊年祭だいほうねんさいだから、
神様かみさまも見みに来くるわよ」



「大豊年祭^{だいほうねんさい}ってなに？いつもと違う^{ちが}の？」

「大豊年祭^{だいほうねんさい}はね、六年^{ろくねん}に一回^{いっかい}しかやらない

おっきなお祭り^{まつ}なの。

ほら、あそこに

ミルク様^{さま}がいらっしやるわよ！」

去年^{きょねん}はいなかった大きな顔^{おお がお}の神様^{かみさま}が、

お付き^つの子二人^{こ ふたり}と

道^{みち}ジュネーの前^{まえ}を歩いていました。



「ミルク様^{さま}って何^{なん}の神様^{かみさま}なの？」

「お米^{こめ}やお野菜^{やさい}をたくさん実^{みの}らせて、

みんながご飯^{はん}をいっぱい食^たべられるように

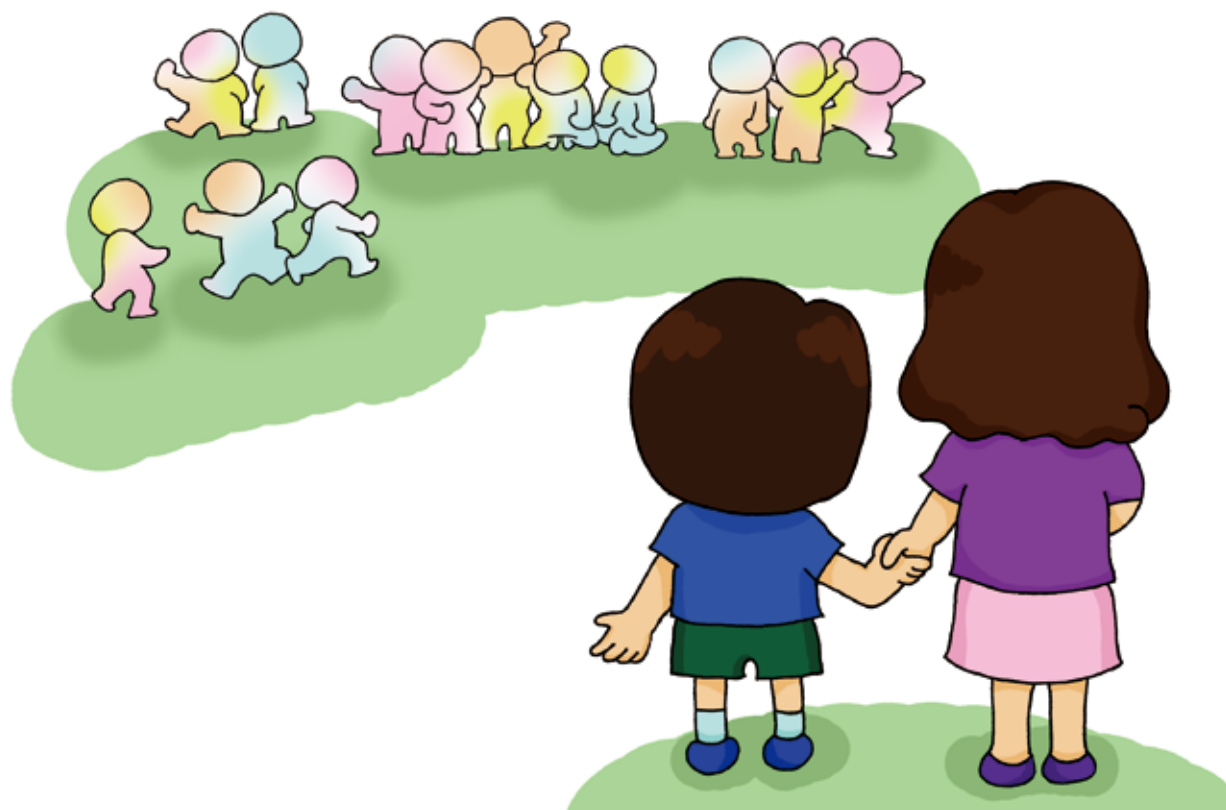
してくれる神様^{かみさま}よ。

さあ、準備^{じゅんぴ}して豊年祭^{ほうねんさい}に行^いきましょう！」



いつもお母さんと散歩しているときに
通りがかる馬場。

いつもは誰もいなくて、
芝生が一面に広がっている馬場のまわりに、
今日はたっくさん人が集まっていた。



隣に住んでいるおじいとおばあが、
僕たちを見て声をかけてきた。

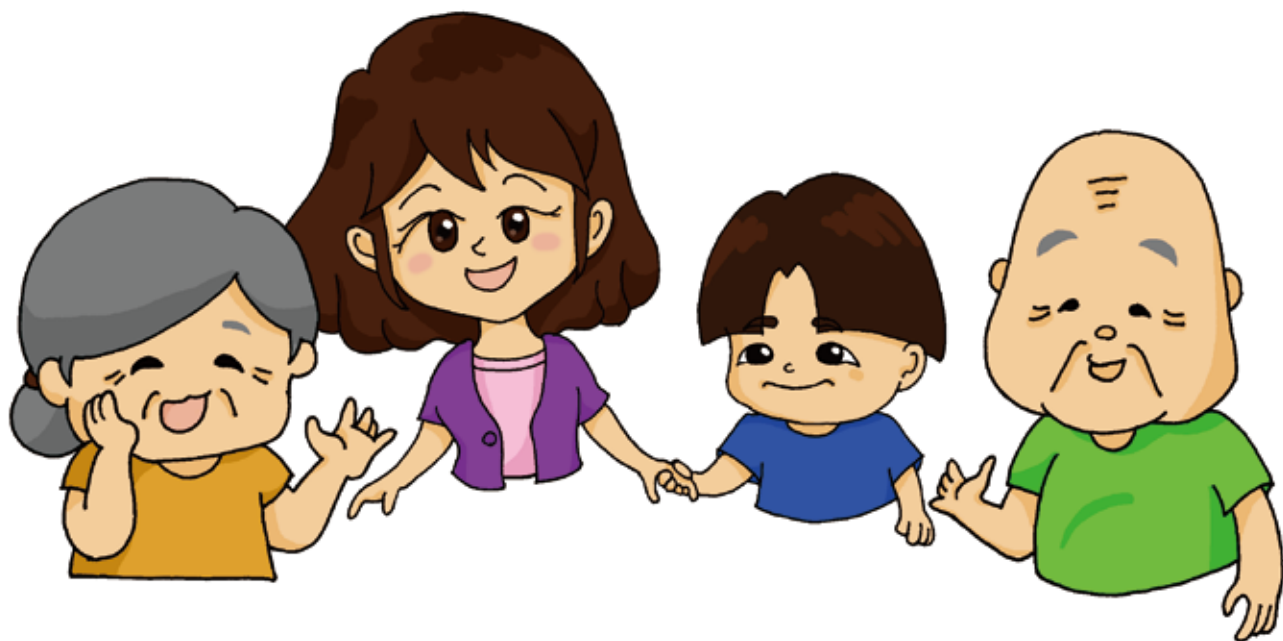
「こっち空いてるよ！一緒に座って！」

【巻ち棒】始まるよ！

今年は、たけるが【巻ち棒】デビューだからね！
楽しみやっさー

「あいつ！たけるはもう中学生ねー！
練習頑張っていた？ 楽しみだねー」

そんな会話をしている中、馬場では、
衣装を着たおじさんやお兄さんたちが、
長い棒を持って列を作っていた。



「あのお兄さんたち、何をしているの？」

「今から【巻ち棒】が始まるのよ。」

今馬場にいるみんなで、

大きい鳥の群れみたいに

ぐるぐる回りながら、

来年もいっぱい作物ができますようにって

お祈りするのよ。」



お母さんが教えてくれている間に、

「カン！カン！カーン！」

と、鐘の音が鳴りはじめた。

輪になっていたお兄さんたちが

「ヒャーユイ！ヒャーユイ！」と

声を上げながら、一斉に動き始める。

大きく広がっていた輪は二つに分かれ、

二つの大きな竜のように馬場を動き回る。

みんなぎゅうぎゅうになりながら丸まって、

「ヒャーユイ！ヒャーユイ！」と

声を上げて二つの大きな渦（巻ち）になった。



カン、カンなる鐘の音や

「ヒャーユイ！ヒャーユイ！」

という掛け声の大きさに

びっくりした僕は、

お母さんにしがみつかながら

「今からどうなるの？」と聞いた。

「今からね。この二つの渦（巻ち）が

一つになるのよ。

【タカマチ】っていうの。

それが出来上がったたら、また元の
大きな輪にもどっていくのよ」

二つの渦（巻ち）のうちの一つが

だんだんと離れていき、

もう一つの渦（巻ち）に

くっついていった。

渦（巻ち）の中では、

お兄さんたちが

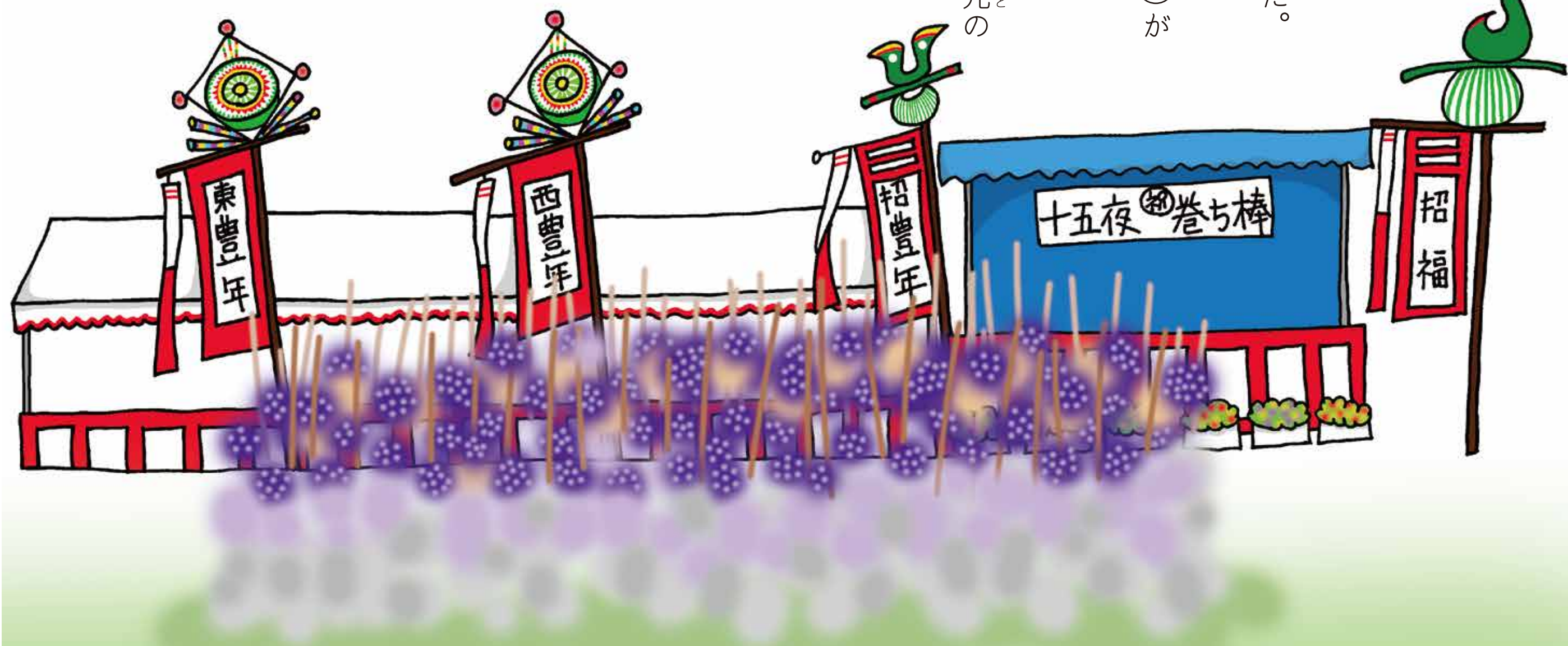
じわじわと動いていて、

渦（巻ち）がすこしづつ

大きくなる。

とうとう二つの渦（巻ち）は

一つの大きな渦（巻ち）になった。



「そろそろ【タカマチ】が出来上がるわよ。」

大きな渦(巻ち)になったとき、

お兄さんたちがみんな一斉に「ウオオー！」と

大きな声を上げながら、持っている棒を

高々と上に上げた。

鐘を持ったお兄さんは

「カン！カン！カン！カーン！」

と鐘を鳴らし、

大きな巻貝を持ったおじさんは

「ブオー、ブオー」

と大きな音を鳴らし続けている。



まわりで見ているみんなも、
大きな拍手をしているから、
馬場はすごい賑わいになった。

そこから、大きな渦(巻ち)になっていた

お兄さんたちがまた列になって

輪を作りはじめた。

ふと見ると、衣装を着て棒を持っている

お兄さんたちの列の中に、

隣に住んでいるたけるにーにーの姿があつた。



保栄茂の巻ち棒（大豊年祭）資料

約200年の歴史を誇る保栄茂の「巻ち棒」は、6年に1度、卯年と酉年の旧暦8月15日に、開催される大豊年祭です。

保栄茂の馬場で行われる十五夜祭は、毎年開催される保栄茂の一大行事です。

豊見城市内で唯一のミルク神をはじめ、大きな旗頭、綱引きに伝統舞踊等が披露されます。その中で6年毎の卯年と酉年にだけ行われる演舞が「巻ち棒」であり、盛大に開催されます。

巻ち棒は、保栄茂の男性が参加する集団の棒演技である。巻ち棒の型は「タカマチ」といわれ、大空を雄々しく旋回する鷹の群れの様子を表現したものとされる。馬場全体を使い、棒を担いだ群衆の一糸乱れぬ動きが特徴である。



平成23（2011）年 巻ち棒



戦前の〈上宜保〉昭和14（1939）年

一時中断した時期もあったが、大正初期頃に従来の巻ち棒を基礎として現在の型を再興したという。また、終戦直後、物資の乏しい時期には、保栄茂出身のハワイ移民者から衣装や小道具類等が送られるなど、多くの出身者や地域の人々に支えられ、今や保栄茂の“誇り”として内外に知られている。



昭和32（1957）年



平成5（1993）年 道ズネーイ

「僕も大きくなったら【巻ち棒】できるの？」
お母さんに聞いたら
「そうねえ。中学生になったらできるかな？」
たけるにーにーにーが、
手を振りながらこっちに
向かって歩いてくる。
早く中学生になりたいな！
たけるにーにーにー向かって
走り出しながら、
僕はそう思った。



保栄茂の巻ち棒 ―六年に一度の大豊年祭― あとがき

地元の歴史・文化広め隊代表 新 田 宗 市

この「保栄茂の巻ち棒 ―六年に一度の大豊年祭―」は、豊見城市の保栄茂地区の伝統行事「大豊年祭」で披露される「巻ち棒」という伝統演舞にスポットを当てた絵本です。

保栄茂地区では、毎年「豊年祭」が行われていますが、六年に一度、この巻ち棒やミルク節などが行われる「大豊年祭」として、盛大に豊年祭を祝っています。決まった期間ごとには開催されない珍しい行事となります。

今回、豊見城の歴史文化のなかで、「なにか絵本にしようか」と検討会を行っているときに、この六年に一度の大豊年祭のことが話題となりました。実は、この本が出るその年、二〇二三年の旧八月十五夜が大豊年祭のその年となるのです。

なんてタイムリーなんだと会議は盛り上がり、満場一致で大豊年祭を舞台にした絵本を作ろうと決まりました。この絵本が皆様の手元に届いたその年、保栄茂の大豊年祭が行われます。

この本では主に巻ち棒に焦点を当てていますが、実際の大豊年祭は多くの演目があり、棒術や薙刀、サイなど多種多様な武術演武もあれば、ミルク節や笠踊り、綱引きや旗頭など、大人も子どももみんなで楽しめる内容が盛りだくさんです。

ぜひこの六年に一度の大豊年祭を、ご家族と一緒に見に行ってほしいな、と思います。

この保栄茂の大豊年祭をはじめ、高安の龜ゴウ祭、翁長の十五夜豊年祭など、各地に伝わる伝統行事はたくさんありますが、その地域の人たちだけではなく、多くの人に知ってもらい、またその大切さを子どもたちにも伝えていきたいと考えています。

最後になりましたが、今回、豊見城市文化課の島袋さんにもご協力いただき、保栄茂自治会の方々に絵本の内容を監修していただくことができました。本当にありがとうございます。

その地域に根差し、そこに生きる皆様と一緒に、地域の大切な文化、歴史を子どもたちに広めていきましょう！

保栄茂の巻ち棒

―六年に一度の大豊年祭―

企画・地元の歴史・文化広め隊

（豊見城市商工会青年部有志の会）

代表

新 田 宗 市
兼 島 正 美
與 那 城 瑛 太
當 間 浩 次

協力・豊見城市教育委員会文化課
豊見城市字保栄茂自治会

制 作

文を書いた人 新 田 宗 市
絵を描いた人 兼 島 正 美

発行日・二〇二三年三月三十一日

発行所・豊見城市商工会青年部

〒九〇一―〇二四二

沖縄県豊見城市字高安三五八―二

☎〇九八―八五〇―二〇六〇
FAX 〇九八―八五〇―〇四六二

印刷所・いろは総合印刷

〒九〇一―〇二二一

沖縄県豊見城市字饒波二一四〇―五

☎〇九八―八五〇―五五四二
FAX 〇九八―八五〇―〇七六八

本書の無断転写、転載、複製を禁じます

*このお話は、史実を軸に創作された
フィクションです